

大野原遺跡調査概報

(559)

1984-9

有明町教育委員会

大野原遺跡調査団

大野原遺跡の調査概報目次

- 1、大野原遺跡研究の経過
- 2、調査の実施
- 3、各埋葬施設
 - A、1号合口カメ棺
 - B、2号合口カメ棺
 - C、3号合口カメ棺
 - D、4号
 - E、巨石蓋土坑墓
- 4、合口カメ棺の埋葬形と方向位
附表、島原半島及びその附近における合口カメ棺の埋葬状況表
- 5、遺物、石器、
- 6、総括
附表、大野原遺跡調査団組織表

大野原遺跡の調査報告

古田正隆
森見富士郎
吉田安弘

1、大野原遺跡研究の経過

昭和43年、第1図に示す丙地番の900番地において、畠所有者の金子順氏（有明町境ノ松居住）が農作業中／基の合口カメ棺を発見、これを聞知した当時の国見高等学校社研部員永松実君を中心として、数人でこれを掘り出した。（国見高等学校考古資料館に保管）翌44年3月同校社研部がこの地を発掘調査（註1）、更に第2、3図に示す巨石を蓋状とした構造の土坑墓のあることを発見、この土坑は第4図に示す土器の副葬を伴ない、弥生文化前期末から中期に比定出来る、（註2）埋葬施設であることを知り、大陸の（中国）埋葬施設が、日本の古墳文化のそれと異なり、地下施設であるといえ構造上類似点があり、日本の古墳文化の源流を探るうえで、極めて重視すべき遺跡であることを知り、後日の再調査を期し、埋めもどして保存につとめてきたところであったが、この度有明町に史の綱さんされるに当たり、この構造の精査を計画7月10日より発掘調査を実施す。（7日より位置確認試掘）

2、調査の実施

調査は附表の調査団を組織、国見高等学校の協力を得て、前記巨石蓋を持つ土坑墓は丙の905番地芝田益男氏の所有地で、調査の対象をこことし第1図の如く、丙番地の900、905、903の境界地である905番地の北西隅部において、約60平方メートルの発掘を実施、巨石蓋土坑墓を中心として、新たに合口カメ棺2組（内／基は畠瀧用水道管の配管設置に当り破壊されていた）の発見があった。（第5～9図）

3、各埋葬施設

A、1号合口カメ棺、（第10図 N01、第5、6図）

弥生中期の容器土器（研磨）を利用したもので、頭部を略々南々西とし、水平に埋葬されていた。（頭部の方向は雲仙山系の九千部山に向っていた）多分幼少児の埋葬であろう。

B、2号合口カメ棺、（第10図 N02、第7図）

2号合口カメ棺は、上部は一般日常容器の利用であったが、下部はいわゆるカメ棺としてのもので、これも水平埋葬であるが、頭部の方向を略々東方（有明海方面で近くの音の入江）としていた、多分少年期のものであろう。

C、3号合口カメ棺、（第10図 N03、第8、9図）

3号合口カメ棺は今回発見されたもののうち最も大型で、成長期前のものの埋葬とみられ、これも水平埋葬で頭部を南々西とし、有明海に頭を向けていた、灰状であったが骨の残存をカメ棺内にみたのは3号のみであった。

D、4号、（第10図 N04）

詳細不明、人骨の小片が若干散乱していた。カメ棺に対する埋葬は、近接する縄文後晩期遺跡である国見町神代孫遺跡が頭名であり、^(註3)カメ棺の葬法は施席を伝わり、青森県の亀ヶ丘まで見ることが出来、大陸では揚子江沿岸において知られ、この文化的な発現はどこか今だ定かでないが、生産文化の新石器文化によって促がされたことが考えられ、カメの信仰は大きくその意を暗示するものといえるかも知れない。（註4）

E、巨石蓋土坑墓、（第10図 N05、第2～4図）

九州地方の土坑墓は、その多くは石蓋や卓石等を伴なうものであることが早くから注意されてきたのである。（註5）概要として石蓋土坑墓は福岡県においては箱式石棺墓と、大分県においてはカメ棺墓と共に存していることは以前から注目され、佐賀、長崎、熊本各県の卓石を伴なう土坑墓は、必ず支石墓と共に存することも注目されてきたところである。

（註6）

然しここでは本遺跡の土坑墓が、後期古墳の横穴式に類似した横口式であることが注目されるのであり、構造の概要を

述べれば、略々直徑／・ 50メートルの横円形で、深さ40センチ程の土坑で、褐色砂質土と、黒褐色火山灰土の混土で土蔓頭に盛り土し、その上を更に5センチ位の厚さの粘土をもって被り、つき固めた上に巨石を蓋状に乗せたものであった。

土坑床底東北隅より土圧によってつぶされたとみられる、弥生前期末から中期の初めに比定できる小形土器（第4図）/個の発見があった。（土坑墓の横口は東々北に向かっていた）

上石は安山岩であるがこの附近では求められず、然も下面は平らに、周辺は角を除去したものであった。（註7）（三会景華園の浮石も類似す、文献は同遺跡のものを参照されたい）

4、合口カメ棺の埋葬形と方向位

島原半島の合口カメ棺類の埋葬形と方向については、概要において類似しているといえ、各その地域集団の精神文化によって差のあることは認められるところであり、これらはその生活信仰形、先進文化の波及度等により、副葬品等と共に生活集団の生活様式、身分差、年令別、性別等によっても差違のあるところで、以下若干の接近地の例を示して参考としたい。

韓国においても同じようなことがいえるようである。（註8）

島原半島乃びその附近における合口カメ棺の埋葬状況表(附表)

遺跡名	合口カメ棺の埋葬形と主軸の方向	文献名
三会景華園	水平位、東西、(弥生中期)	長崎県「長崎県史跡名勝天然記念物調査報告(7)」昭和6年6月20日、並に浜口叶氏の森豊藏氏撮影写真ネガ提供 島田貞彦「肥前国南高来郡三会村遺跡」考古学雑誌2/月8月、昭和6年1/月
妙法塚	若干斜位、南北、頭山方向、(弥生中期)	長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査報告集報Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第45集、1979年
深江中原	30°斜位、東西、(弥生後期、小兒)	古田「深江村中原出土合口 蓋 棺」深江村教育委員会刊、昭和33年1月
南有馬町北岡	水平、東西、頭部西、(弥生中期、金海式)	古田「北岡金比羅社遺跡調査報告」南有馬町教育委員会刊、南有馬町文化財調査報告書第1集、1981年
布津町木場原	水平、略々南北、(弥生後期、西方は山)	古田、諫見富士郎「布津木場原の弥生遺跡一昭和46年12月の緊急調査」国見高等学校社研部報告第9号、昭和47年2月

富ノ原 (大村市)	30°~45°の斜位 路々東西、頭部山の方向、(弥生中期が主体) 斜位は4、3、5、6、7号の各カメ棺	大村市教育委員会「富ノ原遺跡の確認調査概報」大村市文化財調査報告書第4集、1983年 大村市教育委員会「富ノ原遺跡群調査概報」大村市文化財調査報告書第3集、1982年
--------------	--	--

5、遺物

石器、(第1/図)

この石器は一般に双角状石器と呼ばれているが、長崎県報告では礎器の名称を用いている、礎器の概念は、一般的に石器の概念を越えて使用痕のある砾石もいい、形の上で約束ごととしてなし得ないものまで含まれるものがあり、ここでは從来形状名称を用いてきた双角状石器の名称を使用する。

長崎県教育委員会刊「長崎県埋蔵文化財集報Ⅱ」の66頁に、この石器の出土地名表が掲載されているが、更に管見にふれた若干の遺跡を加筆し参考の資に供し、多くは本報告で述べることとしたい。

佐賀県宇木汲田貝塚、(例)筆者保存、(弥生)、口ノ津柄度(せんだん)貝塚、(弥生)、島原安中中南、(縄文晩期-弥生)、有家堂崎海中、(文化期不明)、中田、(有明町、縄文晩期-弥生)、大船、(吾妻町弥生)、田内川、(吾妻縄文晩期-弥生)

6、総括

この地一帯は有明牛蒡の生産地で、小原下でも報告したように、(註9)収穫には80センチ以上植土を掘りあける關係上、土坑上の巨石が当時地表下50センチであったが、現在では相当移動させられていた。

当時の実測図、写真等を参考にすれば施設の概要は把握出来たとされよう。

大野原遺跡は海岸までの距離約700メートル、標高18メートルの扇状台地の畠地帯である、遺跡の南側は境ノ松川の小流が西から東に流れ、この川床と台地の高低差は約2メートルで、即ち遺跡地は小流に沿う低台地端部ということができる、(5万分の1 國土庁地図、島原、おおみさき三角点 / 3. 94より西々北600メートルの地点) 附近一帯は、若干ではあるが縄文晩期の黒色研磨土器(黒川式)を含む弥生中期、古墳文化中期、後期の遺物や、鉄斧の散布をみ、土坑墓(第1図 N 07)、横石塚形埋葬(第1図 N 06)等各種埋葬の群集地であり、貝塚の存在さえ知られているのである。

第1図 N 07は略々南北を主軸とし、長さ3.80メートル、幅約1.30メートルの長楕円形で、深さ30センチ内外の舟底形の土坑を掘り、土坑内南側に人頭大の石を2個、南北側西壁に1個の平石があり、その平石の反対側である東壁に円形のピットがあり、平石やピット周辺には木炭や灰層の堆積があった。(一種の周溝墓)

九州における土坑墓の問題点としては、北九州における縄文晩期の支石墓は、(註1) 生産社会の階層分派に伴なった所産であったか否かは、多くの問題が残されているとしても、弥生文化の支石墓は階層社会の所産であることは否定できない、とするならば巨石蓋土坑墓は、巨石文化に影響された墓制の所産であるといえるであろう。

支石墓に伴なう小形土器の副葬は原山、(註2) 葉山尻5号、五反田1号、同3号、割石原等において認められ、(註3) 当大野原遺跡においても本例並に昭和43年7月出土した、合口カメ格の副葬品として発見された例もある。弥生の石蓋土坑墓は九州においても類例は非常に多く、然し本例の如く巨石をもつてする例はみないとところである。要はその蓋石の大きさと重量が問題であり、階層分派の発展と古墳文化の巨石壙発生との関連において、この過程を示す資料としての提供を得たとされよう。

又 N 06は、一種の横石塚であり島原半島ではこれに類するものに、深江町中原、(註4) 南有馬町金比羅 等(註5) のものがあり、南鮮においても最近報じられている。(註6)

本遺跡では弥生時代のゆつの墓制を知り得たが、埋葬主体の把握は今だなし得なく、今後の調査に期待しなければならない。

横石塚には後世の祭祀的なものもあるが、(註7) ここでは弥生文化期に属することは確実である。

遺跡地の西上部には雲仙山系の高申山が位置し、その裾は東に張り出してゆるい扇状地形傾斜を形成しつつ有明海に連なり、水田に乏しくその多くは畠地地形の台地を形成して、概要として他町村の状況とは異なる地形を示す。

大野原遺跡も上記した傾斜台地の海岸端部に位置し、主体的には標高16~18メートルであるが、島原市との境界に近い小流域谷川の川口右岸には、「敷坪」の地名があるものの、条理制がここまで延びていたかは疑問がある。

大野原の南々東約800メートルの地点に松尾遺跡があり、(註8) 東々南約500メートルに小原下遺跡が位置し、(註9) 松尾遺跡の南約300メートルには一野遺跡がある。(註10)

(地層について)、(第2図)

現地の地層の形成は、各断面共に1層は黒褐色耕土、2層は黒褐色土、1TEの3層は黒色土、1TSの3層は褐色土、2TSの3層は黒色土、1TEの4層、1TSの5層、2TEの3層、2TSの5層は褐色粘土層、1TS、2TSの4層は、黒色土に下層の粘土層が混入した混土層で、耕作中の地層の搅乱であることが認められる、されど当時の生活面は3層の黒色土面であったことが判断できることである。

大野原遺跡調査団組織表（附表）

	氏名
調査団長	金子一之（町長）
副団長	菊池恒義（教育長）
団員	諫見富士郎（日本考古学協会々員）
〃	吉田安弘（島原市文化財審議委員）
〃	石原定義（教育次長）
〃	宮川武利（教育主事）
〃	中村洋司（教育委員会）
〃	森 新蔵（町史編さん委員）
調査担当者	古田正隆（日本考古学協会員）
国見高等学校社研部員	3年 中島修一、中山 効、森川正弘、坂本しのぶ、前田明美、中島賢子、和田清美、渡辺美佐子、部長小瀬修一 2年 荒木考輔、 1年 江崎亮太、山口大助、末本孝幸、赤尾和宏
有明町教育委員会調査協力者	吉田正富、伊藤千代子、佐々木敏士、田浦 圭

注解

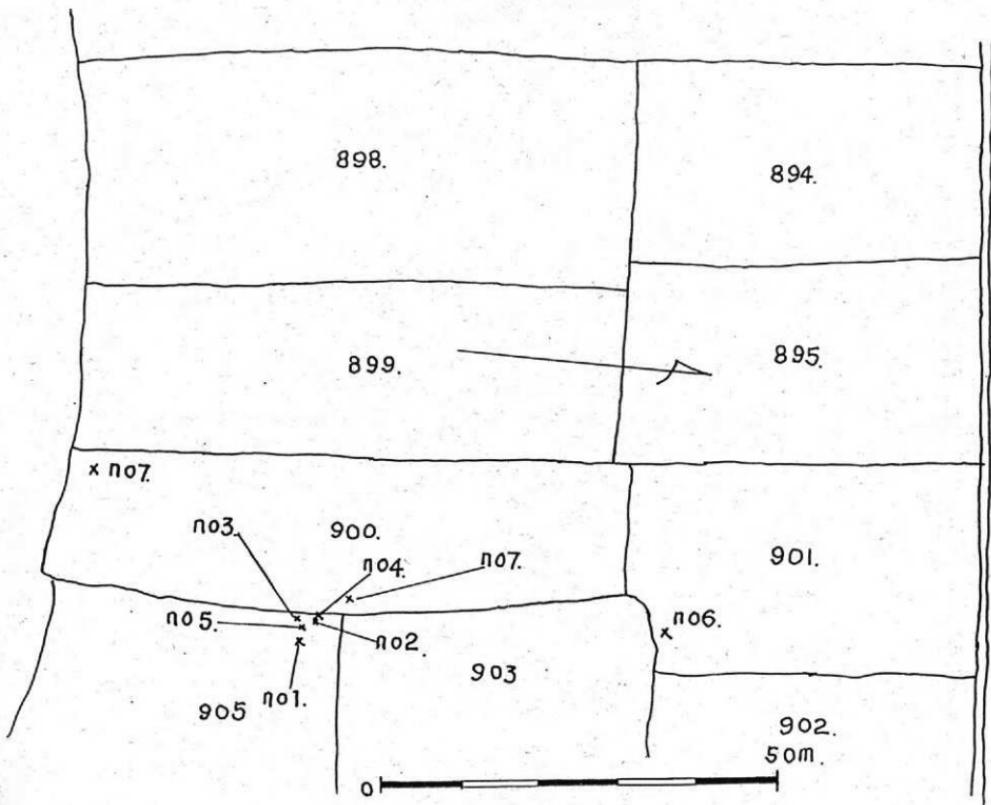
- 長崎県立国見高等学校社研部「有明町大野原の研究」社研部報7号、昭和44年4月
古田「巨石壙土坑墓の新例」しまばら、1969年11月。
- 口縁部の形状から前期2式にも類似、森直次郎「各地域の弥生式土器（九州）」日本考古学講座4、昭和30年4月、板付出土鉢形土器にも類似点が多い（福岡高校保）。
- 古田「長崎県の縄文時代のカメ棺」考古学論叢2、1974年5月。
賀川光夫「西日本のカメ棺一覧」考古学論叢2。
古田、諫見富士郎、本馬卓夫「西北九州における縄文後晩期埋葬域成立の意義を探る」国見高校社研部報告第11号、1978年。
- 国見町教育委員会、島原史学会刊、古田「いかだ遺跡発掘調査報告」1969年3月。
- 横田健一「聖なるカメ棺—考古学と文化人類学との接点の一例ー」陵 N 0 9、昭和59年5月3日、関西大学考古学資料室刊。
- 小田富士雄「九州地方土坑墓地名表」九州考古学、1957年。
- 佐賀県唐津市鏡町東宇木追頭、松浦郡玉島村五反田（現唐津市）葉山尻熊本県玉名郡大野町年の神、長崎県北有馬町原山、佐々々町裡山等、文献省略。
- 前出1、古田「土坑墓についての一考察」野鳥文化4、昭和33年4月。
- 成沢俊、武本純一訳「柴山江流域のカメ棺墓研究」古文化談叢第13、九州古文化研究会、1984年。
古田「製鉄遺構を伴なった小原下遺跡調査報告」百人委員会報告第7集、1979年6月。
- 前出6。

- / 0、森 次郎「長崎県狸山支石墓（予報）」昭和33年、秋季西日本史学研究発表要旨。
日本考古学協会西北九州聯合特別委員会「島原半島（原山、山ノ寺、藤石原乃び唐津市（女山）の考古学的調査」九州考古学／0、昭和35年／0月。
同上「島原半島の考古学調査第2次概報（昭和36年度）」九州考古学／4、昭和37年3月。
尚、狸山は古田発見調査計画を立案す。
- //、松尾植作「北九州支石墓の研究」昭和32年6月／日。
- / 2、上田俊之、古田「特殊な弥生配石土坑墓の調査」九州考古学//、//2合併号、/96.2年。
- / 3、別表、南有馬町金比羅社遺跡参照。
- / 4、考古学ジャーナル／2、/96.7年9月 考古ニュース、青銅器時代の横石塚、韓国忠清南道大田市西町。
- / 5、南山大学人類学博物館「正家横石塚群—中世の塚発掘調査報告一」人類学博物館紀要第5号、昭和58年3号石塚より火打鐵や古錢が発見された。
- / 6、長崎県教育委員会「有明町松尾遺跡緊急調査概報」/97.8年9月、有明町教委刊。
- / 7、古田「製鐵遺構を伴なった小原下遺跡 の調査報告—主として绳文晚期三万田式文化ー」/97.9年。
長崎県教育委員会「小原下遺跡—南高来郡有明町所在—」長崎県文化財調査報告書第67集、/98.4年。
島原工業高等学校郷土部「小原下遺跡の問題点」。
- / 8、古田「一野遺跡概報」長崎県島原土木事務所、/96.0年。昭和44年度部報2号、/97.0年2月。
古田「一野遺跡（南高来郡有明町）」有明町教育委員会、/96.4年。

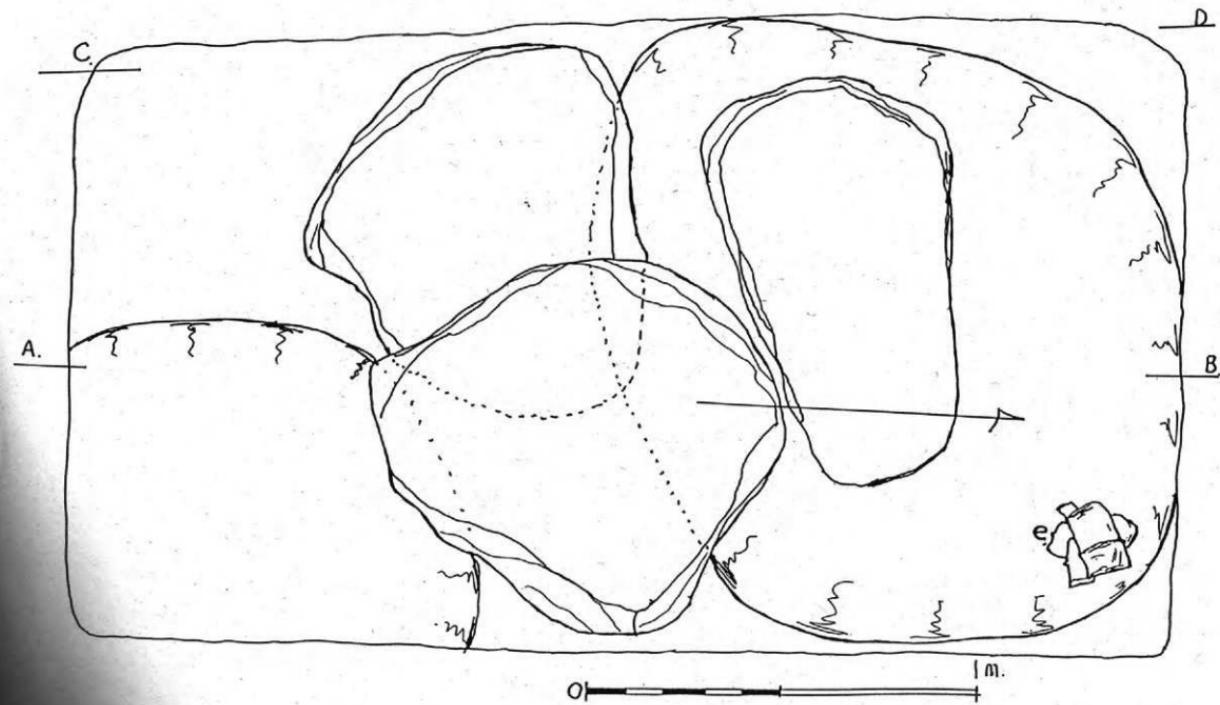
図の番号

- 第 1 図 遺跡地の両番地々図
第 2 図 巨石七_九基実測図 (平面図)
第 3 図 巨石土_九基実測図 (断面図)
第 4 図 巨石土_九基副葬土器実測図
第 5 図 1 号合口_九棺実測図 (平面図)
第 6 図 1 号合口_九棺実測図 (断面図)
第 7 図 2 号合口_九棺実測図 (平、断面図)
第 8 図 3 号合口_九棺実測図 (平面図)
第 9 号 3 号合口_九棺実測図 (断面図)
第 10 図 第 1 ドレンチと各埋葬施設関係図
第 11 図 大野原遺跡出土双角状石器実測図
第 12 図 1、2 ドレンチ各断面実測図
第 13 図 巨石_九基現況実測図
第 14 図 第 1 図 N 0 6 遺構実測図
第 15 図 第 1 図 N 0 7 遺構実測図

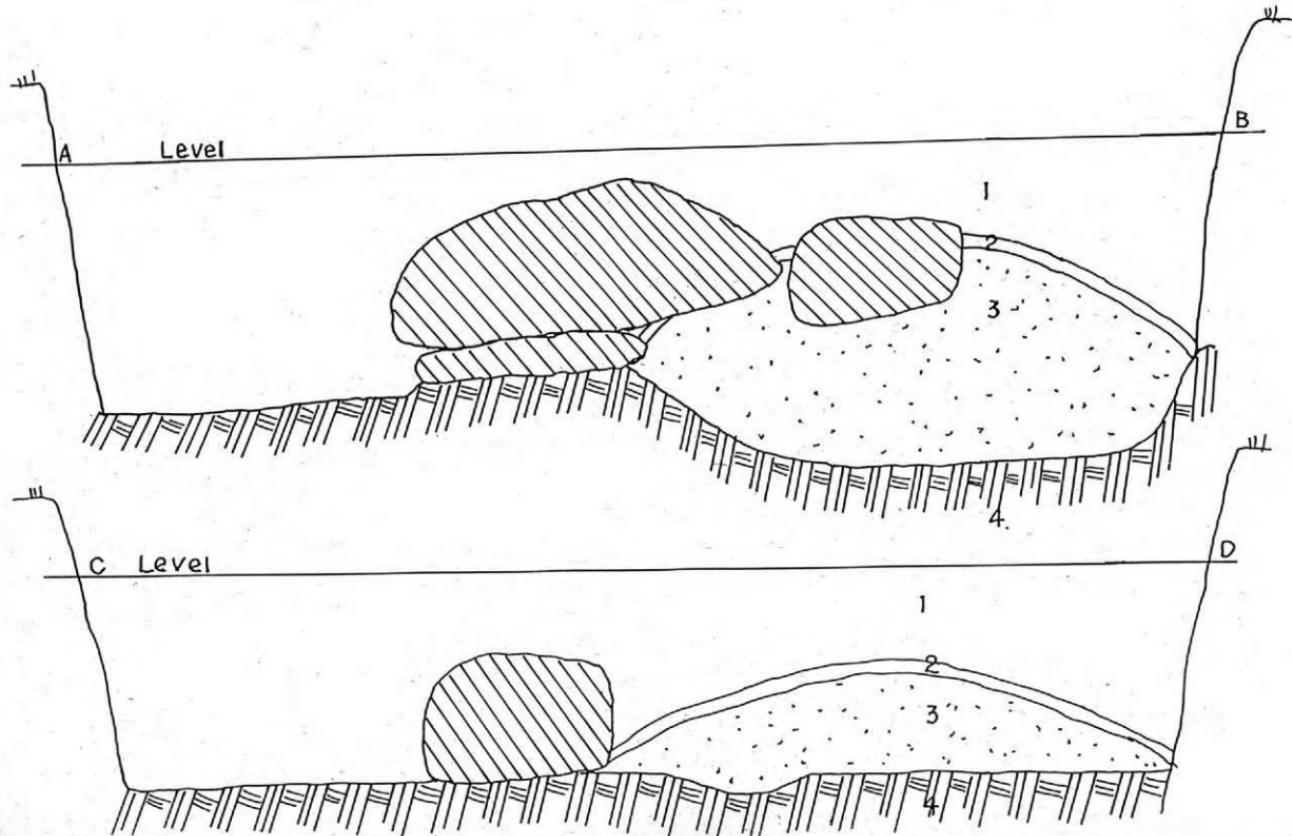
第1図 遺跡地の丙番地々図



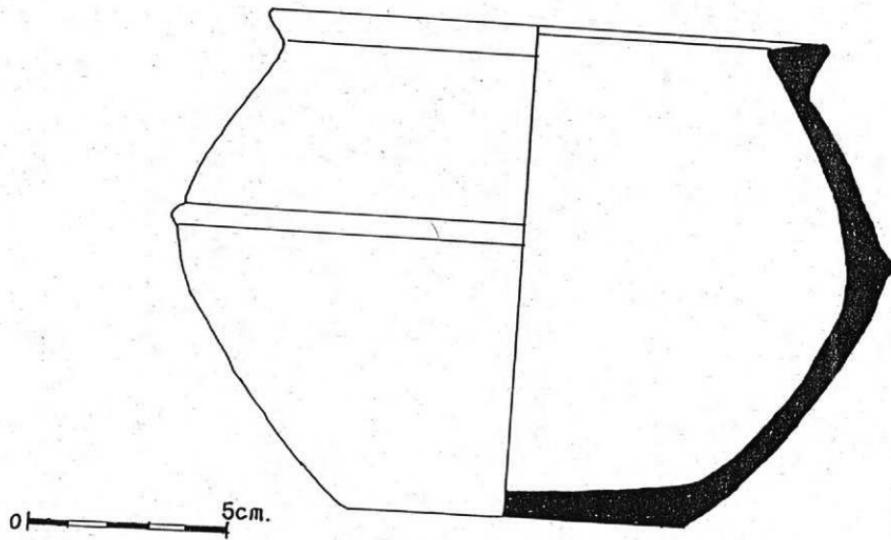
第2图 巨石土坏墓实测图 (平面图)



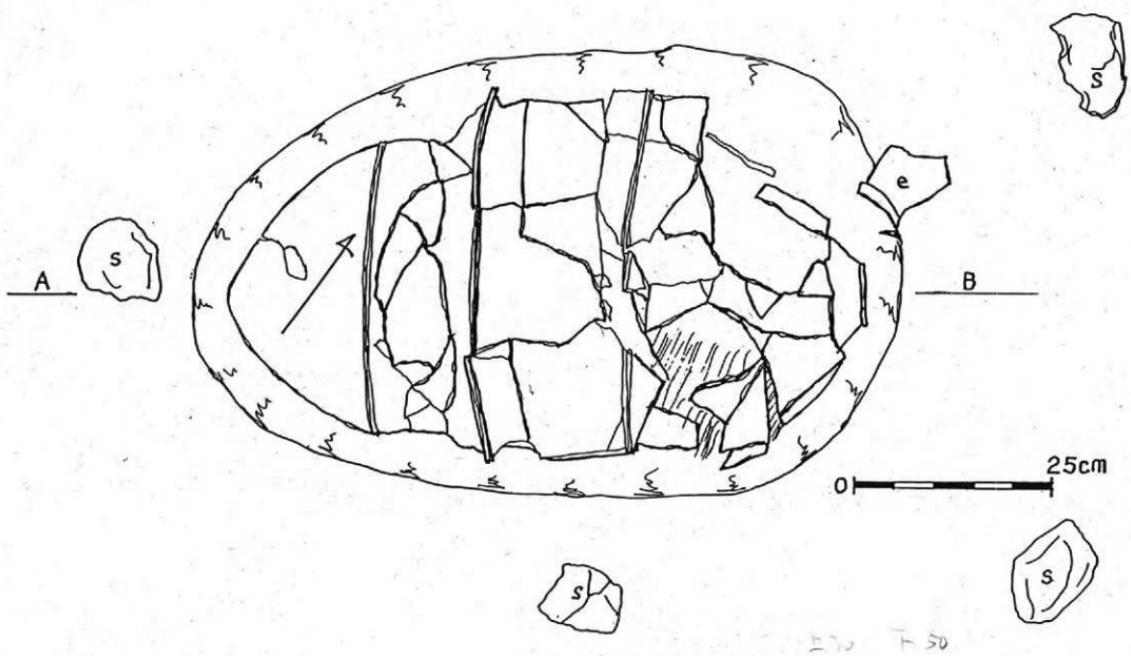
第3图 巨石墓实测图(断面图)



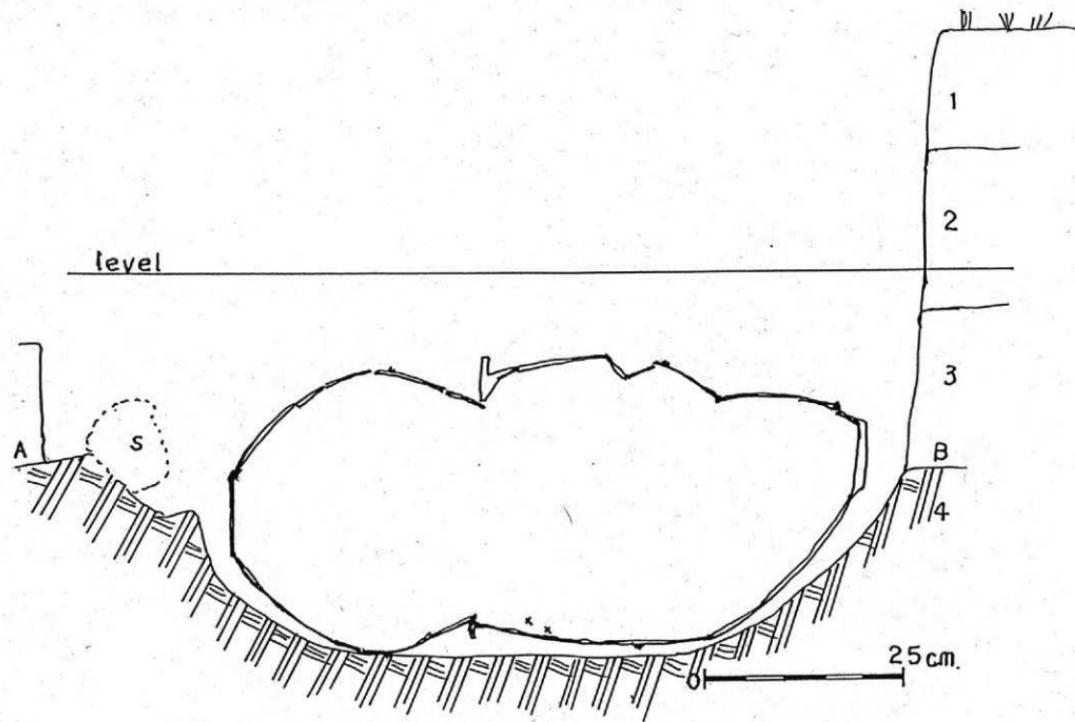
第4図 巨石土器墓副葬土器実測図



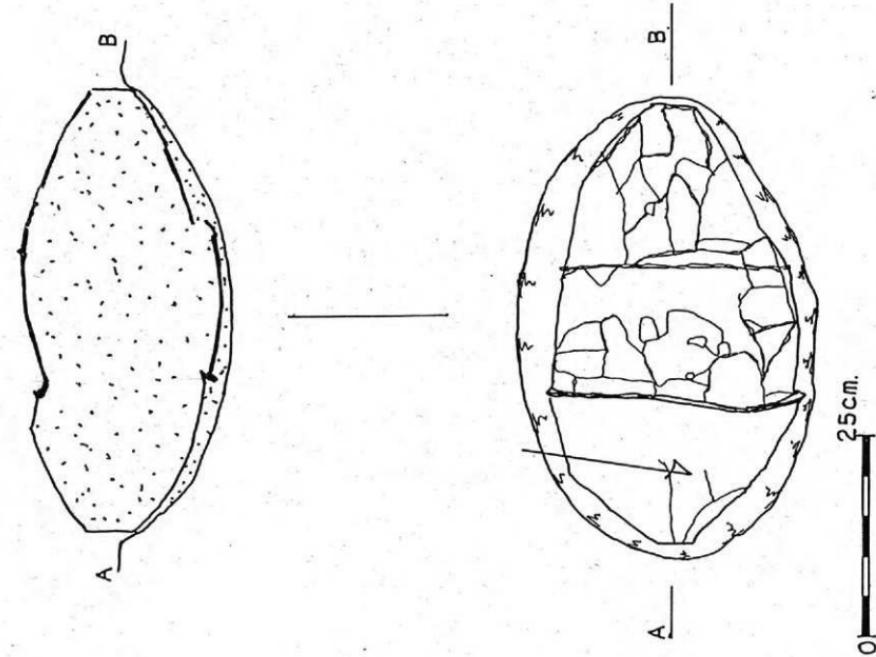
第5图 / 号合口かん棺実測図(平面图)



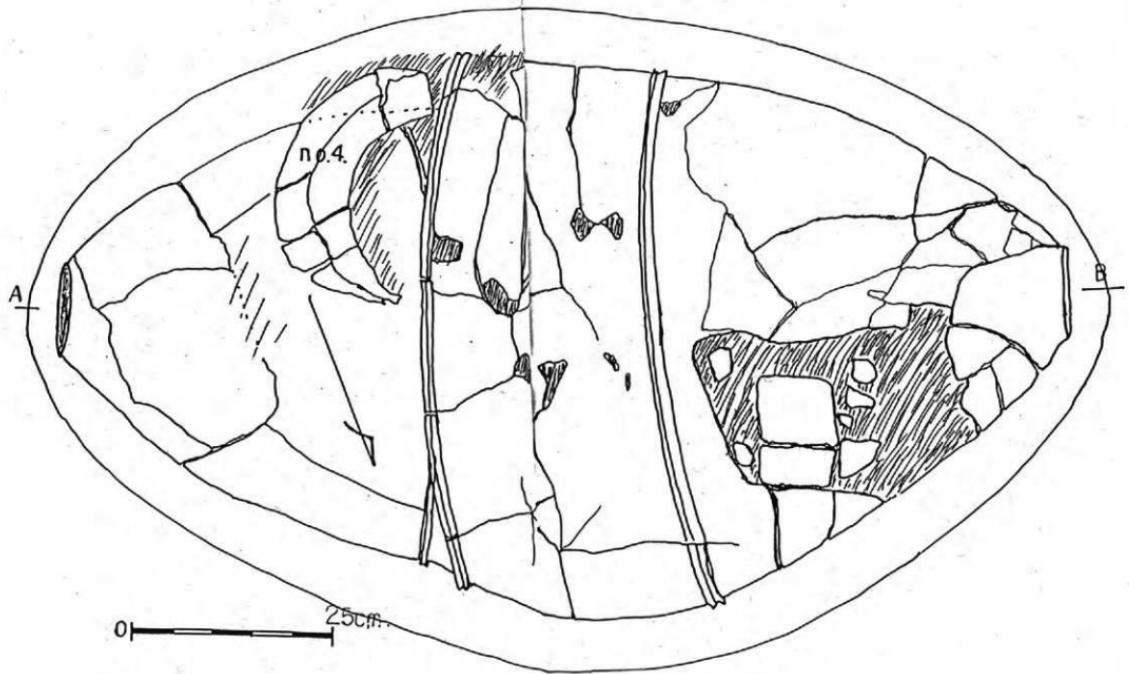
第6図 1号合口か棺実測図(断面図)



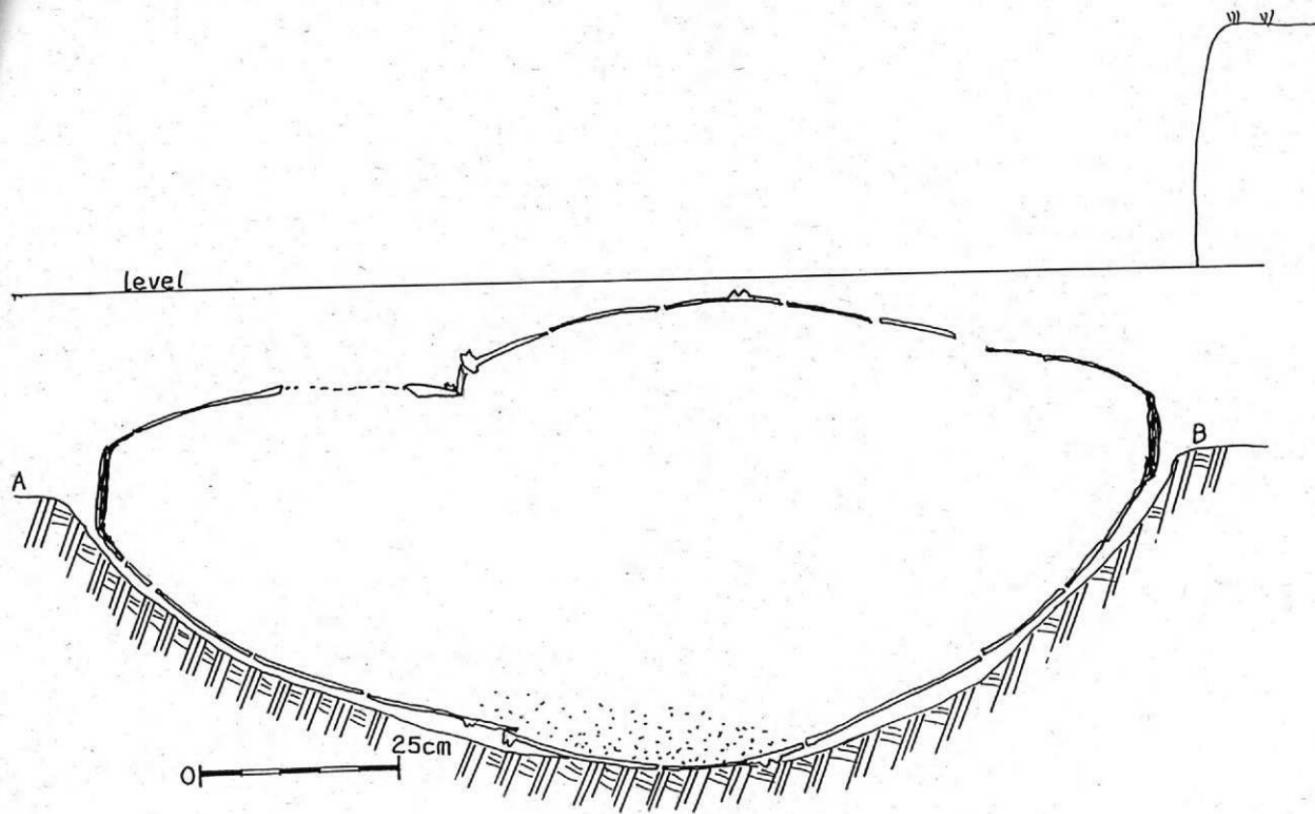
第7図 2号合口力箱実測図(平、断面図)



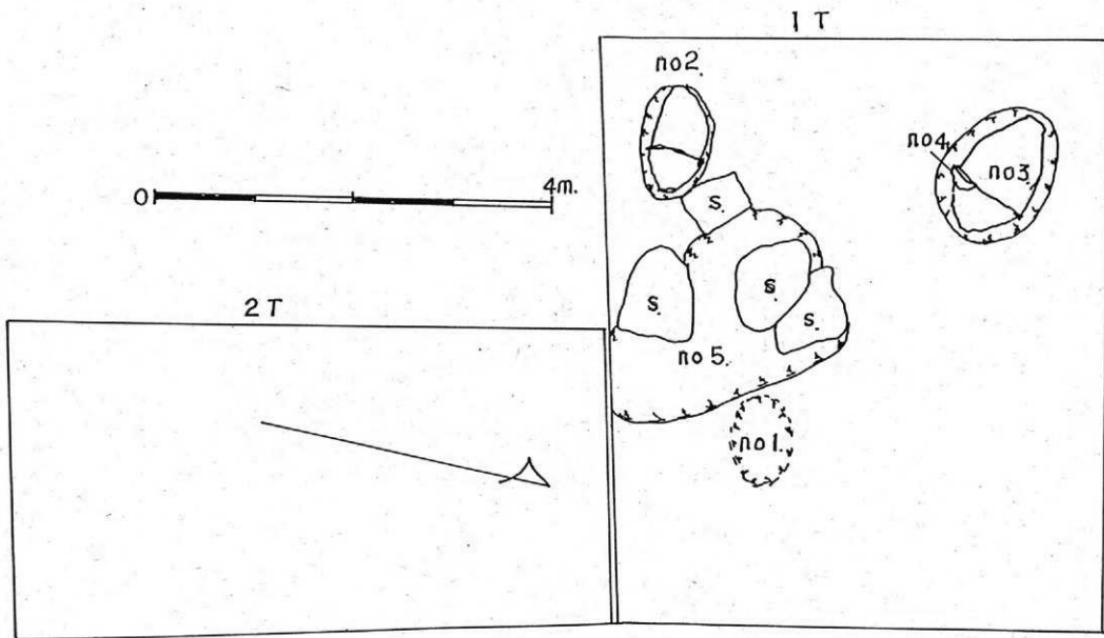
第8図 3号合口ヶ檜実測図 (平面図)



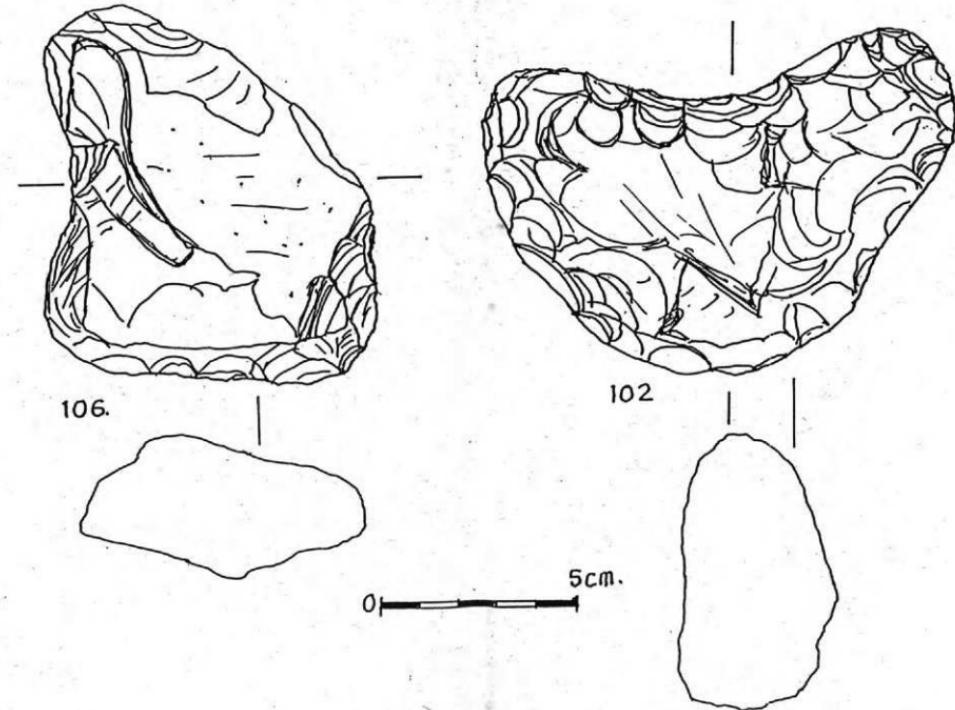
第9図 3号合口ヒ箱実測図(断面図)



第10図 第1トレンチと各埋葬施設関係図

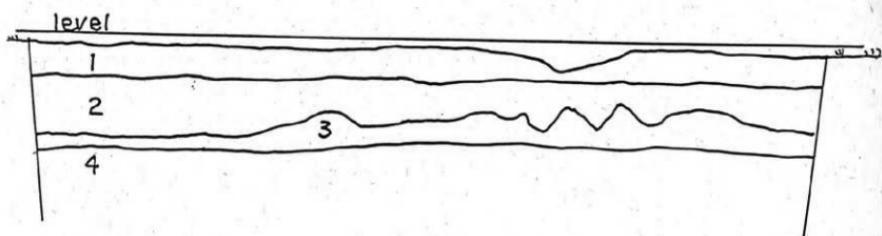


第11図 大野原遺跡出土双角状石器実測図

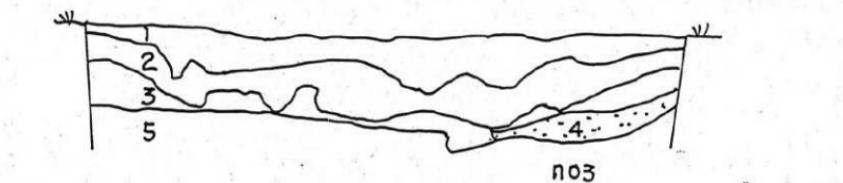


第12図 1、2トレンチ名断面実測図

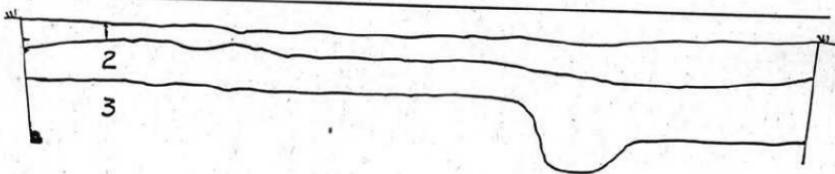
1 TE.



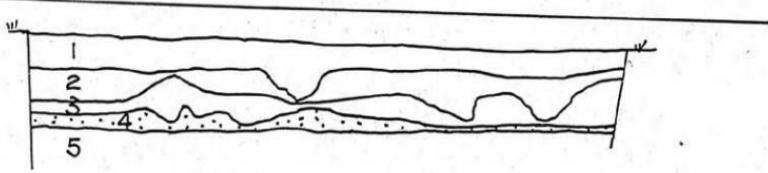
1 TS.



2 TE

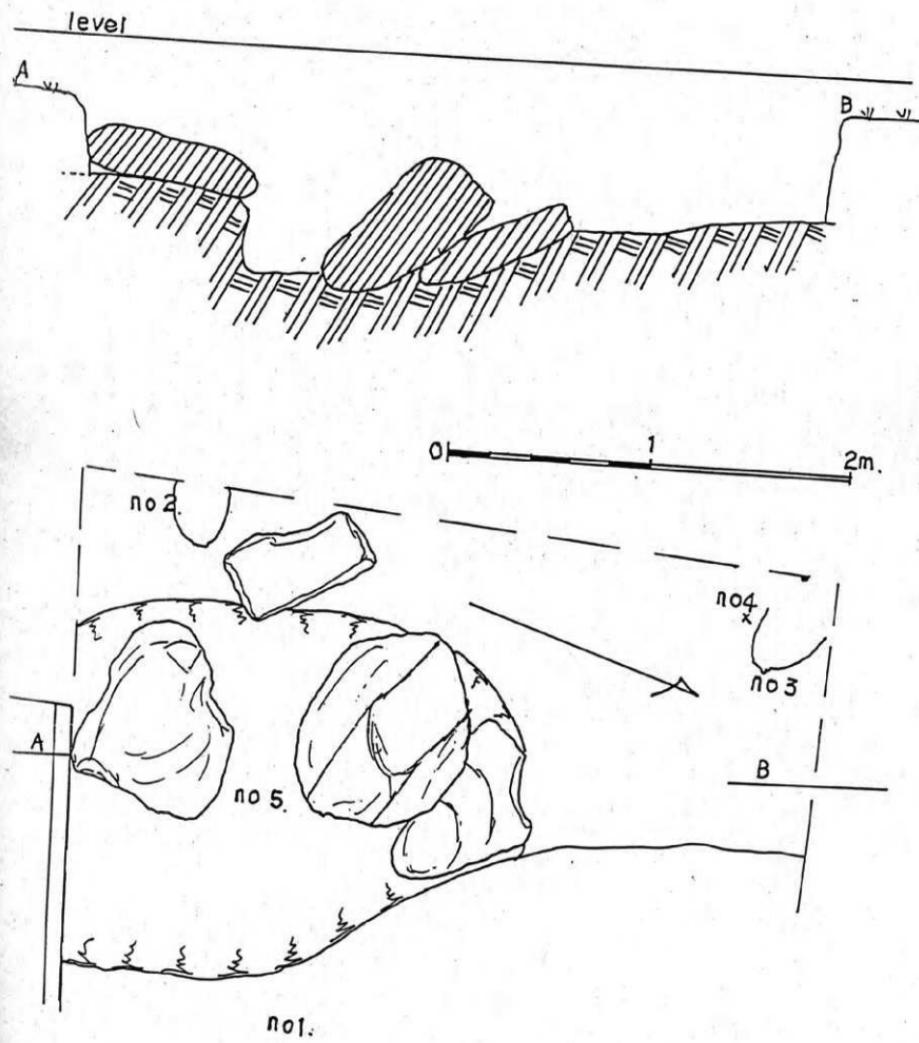


2 TS

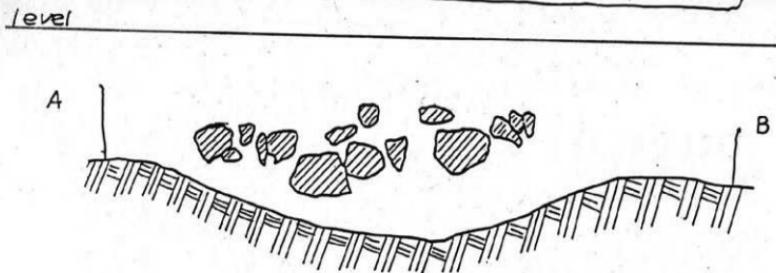
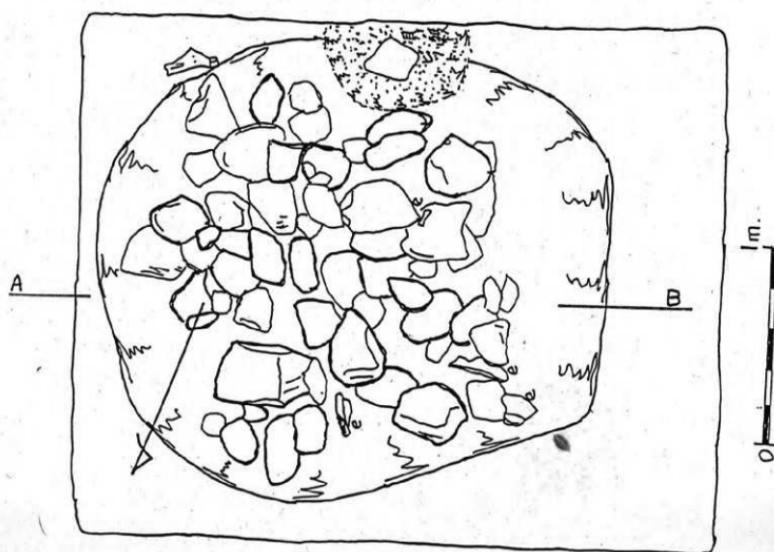


0 2m.

第13図 巨石蓋土塙基現況実測図



第14図 N06遺構実測図



第15図 第1図N 0 7 造構実測図

